

物語の全体像を捉え、『たずねびと紀行文』をつくろう

授業者 木下 忠志

1 本実践の教材について

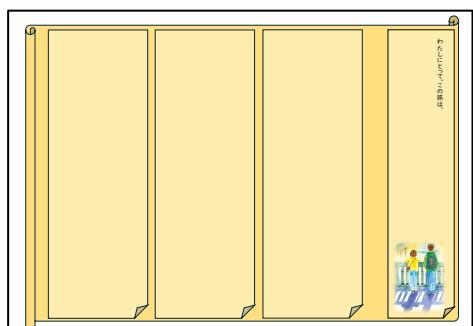
(1) 平和教材の扱いと本作品の特徴

平和教材を学習する時の難しさは「戦争を知らない子どもたちにとって、身近に感じにくい」ことにある。子どもたちだけでなく、教師やその身内にさえも戦争を過去の出来事としてしか知らない現代においては、子どもたちが場面の状況を想像したり、その時に生きていた人々の心情を想像したりすることは非常に難しくなっている。そのような学校教育の現場の中で、本教材「たずねびと」は、平和教材において第三世代に位置付けられている。「ちいちゃんのかげおくり」「一つの花」に代表される戦争当時を舞台とした物語とは異なり、現代から見た戦争について描かれている作品であり、主人公「綾」も読者である子どもたち同様に、戦争について遠い昔の出来事と捉えている。そのため、子どもたちは綾の心情に共感しながら物語を読み進め、物語の最後に描かれている暗示生の高い表現とこれまで綾が経験してきたものや人との出会いを関連づけることで、物語の全体像を豊かに想像し、戦争について思いを馳せることができるのである。

本学習材「たずねびと」は、朽木祥による戦争文学である。物語は八つの場面によって構成されており、綾の一人称視点で描かれている。そのため、子どもたちは、本教材を読み進める中で、同姓同名の「楠木アヤ」という名前との出会いから始まる綾の旅を追体験することができる。作者の朽木祥はこの物語を綾が戦争で亡くなった人々に「共感共苦」する物語であり、読者が綾に共感することで戦争について考えるきっかけとして欲しいと語っている。物語の全体像を捉えるためには、登場人物や場面設定、個々の叙述を基に、その世界や人物像を豊かに想像することが欠かせない。そこで、本単元では物語の中で綾が出会ったものや人、繰り返し出てくるものの役割を暗示生の高い表現と関連付けて考えることを通して、綾の戦争に対する考え方や心情がどのように変化していったのかを具体的に想像することを通して、物語の全体像を具体的に想像する力の育成を目指していく。

(2) 言語活動『たずねびと紀行文』について

そこで、本実践では『たずねびと紀行文』という言語活動を設定する。物語の最後の場面を基に、主人公「楠木綾」がこの旅を「どのような旅だった」と感じているのかを考えることで、物語の全体像と根拠となる叙述やその理由について紀行文に書くことができるようになる。その際、自分が旅の名前の理由として着目した叙述やその出会いが綾の心情の変化にどのように関わっていたのかを話し合うことで、繰り返し出てくるものや人、登場人物が経験したことが物語において、どのような役割があるのかを考えたり、暗示生の高い表現が登場人物の心情の変化をどのように表しているのかを想像したりしていく。「何が書かれているか」という内容面だけではなく「どのように描かれているのか」という表現面にも着目して読むことで、物語の全体像を具体的に想像することができるようにしていく。



たずねびと紀行文

2 単元の構想

今回の実践では、次の2点をポイントとして単元を構成する。

- 言語活動『たずねびと紀行文』に取り組み、綾の視点から「この旅がどのような旅だったのか」を表す言葉と叙述を基に想像した理由を記述することで、物語の全体像を具体的に想像することができるようとする。
- 言語活動の手応えや困り事を色カードで視覚化し、自分の納得度や問い合わせなどを直接書き込むことで、対話の相手を選択して、問い合わせの解決に生かすことができるようとする。

3 研究の視点に沿った具体的取り組み

(1) 「表現と理解の相互循環」を促す言語活動の枠組みのデザインと学習過程の工夫

単元の導入では、読書家の時間に取り組んだ「私の推し作品」の中から既習教材「ずっと、ずっと、大好きだよ」を取り上げ、物語の最後の挿絵を基に、「僕はエルフとの日々をどう感じているのか」を問うことで、子どもが物語の全体像を想像することのイメージをもつことができるようとする。その上で、本学習材の範読を聞き、「綾がこの旅をどのような旅だと感じているのか」を言葉で表現する。それにより、互いの全体像のずれや上手く言葉にできないという思いを表出させた上で、言語活動『たずねびと紀行文』と出合わせる。それにより、よりよい紀行文を書きたいという思いをもって言語活動に取り組むことができるようとする。綾の立場から言語活動に取り組むことで、登場人物の心情について読み深めるとともに、本学習材の特徴である暗示性の高い表現について、物語に出てくるものや人、経験したことなどと関連付けて、全体像を具体的に想像することができるようとする。

(2) 言葉による見方・考え方を働かせ「表現と理解の相互循環」を活性化させる対話の手立て

子どもが活動に取り組み始めたら、個々が着目している叙述や活動の中で生じた困り事、問い合わせ等を見取っていく。その際には、全文掲示を活用して、どの場面の叙述に着目しているのかを共有したり、個々の表現に対する考え方を比較したりして、対話する相手を選択できるようとする。対話の手立てとして以下の2点を講じる。

- 全文を場面ごとに掲示し、それぞれがどの場面に立ち止まっているかを視覚的に捉えることができるようになるとともに、それぞれの話し合った内容をホワイトボードに記述しておくことで、自分の言語活動のつくりかえに生かせそうな相手を選択できるようとする。
- 個々の表現の中でそれぞれの考え方を促進するものは全体で取り上げ、場面設定や登場人物の心情、表現の効果などを話し合ったり、自分がどんな考え方をもったのかを共有したりして個々の表現に生かすことができるようとする。

(3) 学びの自覚化と自己の学びの調整を促す言語活動と学習評価の在り方

本時の学びを振り返る際には、言語活動に対する自分の手応えを色カードで表すとともに、手応えがあつた部分や困り事、次時への見通しなどを成果物に直接書き込んでいくようとする。そうすることで、本時の学習における自分の学びを自覚するとともに、次時において自分の自分と同じ叙述に立ち止まっている他者と話し合ったり、自分の言語活動に生かすことができそうな考え方をもつている相手に聞きに行ったりするなど、相手を選択しながら学びを調整できるようとする。単元末には、単元全体の学びを振り返る機会を設定し、学習内容だけでなく、学習方略や身に付けた力などについても振り返ることができるようとする。